（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

# 平成２９年度委託事業完了報告書【実践地域】

| 番号 | １０ | 機関名 | 群馬県 |
|---|---|---|---|

| 実践地域名 | 拠点校名 | 児童生徒数 |
|---|---|---|
| 群馬県 | 群馬県立吉井高等学校 | ４７６ |
| 群馬県 | 群馬県立安中総合学園高等学校 | ６８９ |

※　児童生徒数については、平成３０年３月現在、拠点校に在籍する児童生徒数を記述する。

## ○　実践研究の具体的内容

生徒が学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の取組を推進し、組織的に研究授業や授業研究等の校内研修を実施して教員の専門性を高める「群馬県高校生ステップアップサポート事業」を推進した。特に、平成２９年度は、各校が学校や生徒の実態に応じて具体的な校内研修テーマを設定した取組とともに、授業における特定の指導方法を推進するものとならないように留意し、育てたい資質・能力を身に付けるために必要な学習過程の質的改善を図った。

県立吉井高等学校では、数学と理科を中心に、全学年、全教科の授業においてアクティブ・ラーニングの視点を持った授業改善に取り組み、生徒の学びが、主体的・対話的で深い学びとなるよう、ＩＣＴの効果的な活用について研究開発を行った。また、カリキュラム・マネジメントの視点から学校のグランドデザインを作成し、育成する資質・能力を各教科、学年で共有するとともに、グランドデザインを定期的に点検し、授業、特別活動、学校行事などを通して生徒が主体的、対話的で深い学びができるよう改善した。

県立安中総合学園高等学校では、家庭と総合的な学習の時間におけるライフデザイン学習を中心に、全教科の授業で、主体的・対話的で深い学びの視点から学習・指導方法の改善・研究を行い、生徒に良き社会人としての意識を醸成するとともに、思考力・判断力・表現力を育成した。その際、外部機関と連携して取り組んだ。

県教育委員会としては、２校の拠点校における公開授業と研究協議を行う形で実践協議会を開催し、拠点校の授業実践や組織的な校内研修の実施の成果等を、県内の公立高等学校等に向けて発信した。

## ○　実践研究の成果とその分析

各拠点校において、各校の実態や課題等を踏まえた上で、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善等を行うことができた。有識者による講演や他県視察等を実施する中で、授業実践に向けた具体的な学習・指導方法を学び、その内容を学校全体で共有化することで教員の授業改善への意識の向上を図ることができた。

各拠点校においては、学びに向かう主体性や対話を重視した授業実践等について、生徒を対象にアンケートを実施した。県立吉井高等学校の結果からは、「授業で学んだことに興味を持ち、更に深く学ぶために、家庭学習を行った」と回答した生徒が６５％以上いたことや、「授業で基礎的な知識・技能を習得することができている」「授業を通じて活用力や表現力を向上させることができた」と回答した生徒が９０％以上いた。こうしたことから、ＩＣＴの効果的な活用や発表形式の授業が、グランドデザインに示された育てたい資質・能力の育成に結びついていると考えられる。県立安中総合学園高等学校の「未来の教室」についてのアンケート結果からは、生徒の主体性や挑戦意欲の向上が顕著であることが分かり、困難に立ち向かおうとするチャレンジ精神や人生に前向きな姿勢が養われていることがうかがえる。また、授業アンケートからは、生徒同士の関わりを重視したペア学習やグループ学習が行われ、こうした学習を通じて主体性がより育まれていることが推察できる。

また、２校の拠点校は、ともに総合学科の高校であり、生徒が将来の目標等を踏まえた「系列」を選択し、その系列に応じた特色ある教育課程を編成している高校である。生徒は多様な科目から学びたい科目を選択することができることや、開講する授業は少人数であるという学習環境が、生徒の学習意欲を喚起したり、個に応じた指導が可能となったりするなど、学校の特性が実践研究の成果の一因であると考えることができる。

実践地域においては、群馬県高校生ステップアップサポート事業を踏まえ、「授業における課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）の実施状況調査」を実施している。「アクティブ・ラーニング型の授業を実施している教員の割合」については、６７．７％（平成２７年度調査）から７２．８％（平成２８年度調査）へと上昇した。群馬県高校生ステップアップサポート事業の推進による効果として「授業改善に係る校内研修の充実・深化」や「授業に対する生徒の意識の高まり」を挙げている学校がとても多かった。授業改善に当たり、組織的な校内体制が整備されていることとともに、良好な取組状況であることが分かった。しかし、「生徒に育成すべき資質・能力の向上」や「教員の専門性の向上」を挙げる学校が５０％から６０％程度であることから、学校における育てたい資質・能力を明確化・共有化するよう学校に対して働きかけるとともに、教員の専門性や指導力の向上に係る支援について、更に検討していく必要がある。

本研究を進めていくことで得られた大きな成果の一つとして、生徒の育てたい資質・能力を明確にすることの重要性を再認識することができた点が挙げられる。特に、県立吉井高等学校がグランドデザインを作成したことは、育てたい資質・能力の明確化とともに、それを育むための手段や教育活動を可視化したことにつながり、教職員、生徒、保護者との共有化が図られることにもなる。こうした意識が拠点校のみならず、他の高校のモデルケースとなり得るものであり、県全体により良い影響を与えることが期待できる。また、県立安中総合学園高等学校の公開授業において、授業後に、公開授業の対象となった学年の教員が生徒の授業の様子や生

徒の変容について意見交換し、授業のプラスの効果について協議した。他校から公開授業に参加した教員は、その協議の様子を参観するという形式で実施した。協議の中心は授業中の生徒の様子であり、生徒の学習方法や学習態度であったことから、授業研究会の新しい進め方や視点が示され、参加した他校の教員の参考となった。

なお、副次的ではあるが、定時制（昼間部、夜間部のある多部制）・通信制を併設した県立高校が独自に授業研究会を実施し、様々な課題を抱える生徒が主体的・対話的に授業に取り組む様子を公開し、同様の生徒が在籍する高校の教員が意見交換を活発に行い、学習・指導方法について協議を行った。このことは、同じ課題を持つ高校との連携した取組であり、学校同士のつながりを強める好事例であり、県教育委員会としては、こうした気運が高まるよう引き続き支援していきたい。

※　「授業における課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）の実施状況調査」における「アクティブ・ラーニング型授業」とは、「一方向的な講義形式のみの授業ではなく、生徒が主体的・協働的に取り組む場面を授業の中で計画的に取り入れて実施した授業」のことである。また、「年間指導計画または単元の指導計画等において、事前に計画するなどして継続的に実施」したり、「特定の学年やクラス、科目のみで実施するのではなく、生徒の状況や科目の特性に応じて、適切に実施」したりするといった条件を付した授業である。

## ○　実践研究成果の活用方策

活用方策として、具体的には「群馬県高校生ステップアップサポート事業」のより一層の充実を図っていく。その中でも、教育委員会が指名したステップアップサポート推進研究員を活用し、教員と推進研究員が学習・指導方法について自由な意見交換が図れるよう、地区ごとの連携を一層重視し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の普及・拡大を図っていく。こうした取組内容について、学校訪問や校長会、教頭会等の機会を通じて、継続した指導・助言を行っていくことで、更なる定着を図りたい。また、拠点校での取組の検証を進めるとともに、県下の公立高等学校等を対象とした実施状況調査も継続して実施し、現状を把握しつつ、教員の抱える課題や不安について支援していきたい。それ以外にも、公開授業の機会を確保することや、実践事例集を作成し各学校に配布することで、県全体での更なる情報共有を図るとともに、アクティブ・ラーニングの実践という本事業がより有意義なものとなるよう工夫していく必要がある。

県教育委員会としては、拠点校に対して、２年間の実践研究の成果を、積極的に情報発信するよう指導していく。県立吉井高等学校におけるＩＣＴの効果的な活用とともに、カリキュラム・マネジメントの観点から、各学校において教育目標や目指すべき生徒像を明確にし、教員及び生徒を含めた学校全体でのこうした目標等を共有しながら、育成する資質・能力を教育課程全体で捉えるよう、全体構造を示すグランドデザインの作成は、各校においても有効に機能すると考える。また、県立安中総合学園高等学校における校内研修会は、生徒の変容に視点を当てて行われることから、県内各校においても参考事例となる。加えて、２校とも外部人材を積極的に活用することで、生徒が学校内での学習が社会と接続していると意識できるようにしたり、様々な生き方を肯定的に捉え「自分事」となるよう工夫している。こうした成果を発信できるよう、公開授業等を実施して、以降他の学校の教員と情報共有していく必要がある。

来年度も、教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に努めたい。それにより、各校がグランドデザインを作成し、各教科等をつなぐ教育課程を核にした授業改善及び組織運営の改善に学校全体で取り組む気運を醸成する機会に活用したいと考える。拠点校２校の取組については限られた教科のみではなく、今後、学校全体の取組につなげることを計画していることから、県内のモデルケースとなり得ると考えている。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

## 平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

| 番号 | １０ | 都道府県名 | 群馬県 |
|---|---|---|---|

| 拠点校名 | 群馬県立安中総合学園高等学校 |
|---|---|

### ○　実践研究の具体的内容

１　学校における本事業への取組状況

（１）ライフデザイン講座

生活文化系列１２名を対象にＮＰＯ法人ＤＮＡと連携し、「高校生のライフデザイン講座」という大学生との協働学習を行う授業を実施した。大学生と一緒に課題解決型授業に取り組んだり事業所見学を行ったりするなど、実践的に学んできた。

【テーマ・教育目標（育成したい生徒像）】〈自分の人生を切り開ける状態に〉
「自分自身を受け入れられ、今後社会に飛び出し、生活課題にぶつかったときに、自分自身で解決できるような人になる」

【具体的行動】
①人生のセンパイの話を聞くことで自分の人生は自分で面白くできることを感じる。
②自分自身の過去や現在を受け入れ、将来の生き方への興味関心を抱く。
③自分自身が探求したいテーマ（マイテーマ）を設定し、マイテーマについて理解を深め将来の在り方を前向きに考え表明できている。

【生徒の目指す姿】
・自分自身、自分とは異なる価値観や考えを受けいれられる。
・「結婚」「出産・子育て」「将来」等の人生全般に対して肯定的な態度や姿勢を獲得している。

【昨年度からの改善点】
①授業の終わりに、生徒が振り返りを行う
②各学期で目指す状態を設定
「１学期：自分の人生は自分で面白くできるんだと実感する」
「２学期：自分の人生を切り開いてきた人と出会う」
「３学期：自分の人生を自分で切り開いていくことができる」
③２学期以降は各自でテーマ（マイテーマ）を持ちながら探求していく。

| 実践の様子<br>ゲスト　産婦人科佐藤病院　福田小百合さん<br> | 「”生き方”に出会う」<br> |
|---|---|
| “生き方”を考える「マイテーマの設定」<br> | 「大人インタビュー」<br> |

（２）未来の教室

## ■２-ⅱ．プログラム概要

DNA Design Net-works Association

### 基本情報

| | |
|---|---|
| 日　時 | 10月10日（火）13:30-15:20<br>（5－6時間目に相当） |
| 場　所 | 安中総合学園高等学校　体育館 |
| 対　象 | 高校１年生235名 |
| テーマ | 高校生活を「じぶんで」面白くしよう！ |
| 狙い | 高校に入学して半年、「お願いされたこと」・「やるべきこと」は出来る生徒が多い。そして日々学校生活は頑張っている様子が見受けられる。一方で自分から目標や目的をもって主体的行動出来る生徒は少ない現状。<br>その中で、この未来の教室をきっかけに少しでも勉強・部活動・課外活動等の中で自分から高校生活を充実できるようにするための行動を起こすきかっけになることを狙いとします。 |
| 実施体制 | 【安中総合学園高等学校】<br>●担当教諭：飯塚礼子先生<br>【DNA】<br>●事業責任者：木村 陸人<br>●運営：沼田翔二朗、辻岡徹也、南条調、櫻井未優<br>●センパイ（大学生・社会人ボランティア）26名 |

### 当日概要

| | |
|---|---|
| 13:30<br>｜<br>15:20 | ●オープニング(10分)<br>進行役からの趣旨・説明等を行う<br>●１　ウォーミングアップ(10分)<br>クエスチョンカード（アイスブレイクツール）を使用し、高校生とセンパイの関係性を築く<br>●２　センパイ語り(1人18分×3人分)<br>センパイが、高校生の頃に抱えていた悩み・壁はなにか？それに対し、どの様に立ち向かったか？今どのようなことに挑戦しているのか？等について語る。<br>●３　ジブン語り(30分)<br>センパイの話を通じて、自分の理想の高校生活について考えるワーク、自分が考えたことや行動宣言をグループや全体で発表するワーク<br>●クロージング　(5分)<br>ガイドからまとめを行う |
| 使用資料 | ［資料01］メモシート<br>［資料02］センパイカタログ<br>［資料03］宣言シート |

Copyright (C) 2017 DNA All Rights Reserved.　※本資料の無断転載は禁じます。

（２）未来の教室

「未来の教室」とは、センパイ（大学生・社会人ボランティアスタッフ）との対話を通じて、高校生がもつ 未来への自発性・意欲を、日常の行動に結び付けることを目指したキャリア学習プログラムである。テーマは「高校生活をじぶんで面白くしよう」であった。２６名のセンパイが１０名弱の小グループの生徒に１８×３回、自分の「挑戦ストーリー」を語った。授業後半で、生徒は自分の高校生活の目標を言葉にし、グループ内で発表した。

「未来の教室」実施の様子

（３）全ての教科の授業でアクティブ・ラーニングの視点を充実させる

全ての教科で、主体的・対話的に深く学び合う（アクティブ・ラーニングの）視点を取り入れた授業を実施するために本年度は４回の職員研修会と４回の学年別の研究授業と授業研究会を行う「授業実践研究会」を４回行った。内容は以下の通りである。

| | |
|---|---|
| 職員研修Ⅰ | 新任者への研修会<br>内容：『本校の昨年度の取り組みについて』 |
| 職員研修Ⅱ | 昨年の振り返り<br>演題：『本校の授業実践の取り組みの成果と課題について考える』<br>（講師：本校非常勤講師　国語科　木内信夫先生） |
| 職員研修Ⅲ | 先進校視察報告会<br>（６月　埼玉県　新座高校）<br>（６月　大阪府　勝山高校、金岡中学校） |
| 職員研修Ⅳ | 先進校視察報告会<br>（１１月　筑波大学附属高校、<br>東京大学教育学部附属中等教育学校） |
| 授業実践<br>研究会Ⅰ | 学年別研究授業・授業研究会<br>１学年数学科　２学年体育科　３学年家庭科<br>「不等式の解とは」　「基礎体力トレーニング」　「子どもの生活」<br> <br>全体講演会　群馬大学教育学部准教授　濵田　秀行　先生<br>演題：「主体的・対話的で深い学び |
| 授業実践<br>研究会Ⅱ | 学年別研究授業・授業研究会　校外７３名参加<br>１学年数学科　２学年農業科　３学年福祉科<br>「関数」　「フランスパン」の製造」　「視覚障害がある方への支援」<br> <br>全体講演会　学習院大学教授　佐藤　学　先生<br>演題：「高校における学びの共同体」 |
| 授業実践<br>研究会Ⅲ | 学年別研究授業・授業研究会　校外２２名参加<br>１学年国語科　２学年農業科　３学年商業科<br>「羅生門」　「食品加工と食品衛生」　「表計算ソフトウエアの活用」<br> <br>全体講演会　群馬大学教育学部准教授　濵田　秀行　先生<br>演題：「授業における学びの主体性」 |
| 授業実践<br>研究会Ⅳ | 学年別研究授業・授業研究会　校外５７名参加<br>１学年英語科　２学年理科　３学年総合研究<br>「動名詞」　「酸化還元反応」　「ライフデザイン講座」<br> <br>全体講演会　帝京大学教授　草川　剛人<br>演題：「高校生が学び合うために、今、教師がすることは何か？<br>−アクティブ・ラーニングと教科の授業―」 |

昨年同様、校内研修にでは次の①、②を導入し、授業研究や生徒理解に努めている。

① **研究授業では教科の授業を見るのではなく、教科の授業を通して生徒の姿を見取る。**

研究授業後の研究協議では先生方が授業を見て気づいた「生徒の様子」について話します（See）。そして、何を感じたのかを話します。（Think）先生方のこれまでの経験や人生の歩み方の違いにより生徒の姿の見取り方は様々だと考えられます。このような先生方から得られる多様な生徒の姿を共有し、自分の日々の授業とつなげたときどんな事に気づいたのかを話します。（Wonder）それらによって生徒理解や指導、今後の授業改善等、教職員としての幅を広げることに生かしていければと考えます。

② **研究協議で心がけたいこと(See　Think　Wonder)の具体的提示**

①をより明確にするために以下のように具体的に提示し、研究授業を観察してもらった。
・○○さんは△△の場面で□□だった。（→ See）
・○○さんを見て学んだことは・・・（→Think）
・○班では△△の場面で□□だった。（→See）
・○班を見て学んだことは□□だった。（→Think）
・部活動中で関わっている○○さんと授業中の○○さんの違い。（→Wonder）
・自分の授業中の○○さん姿と授業中の○○さんの違い。（→Wonder）
・過去関わっていた○○さんの姿と授業中の○○さんの違い。（→Wonder）

また、授業実践研究会後には職員向けの広報資料「学びを学ぶ」を発行し、他学年での様子や研究授業中の発言や内容を共有した。

学びを学ぶ
平成３０年 ２月１日
安中総合学園高等学校
学習指導係発行 第９号

校内学年別研究授業開催
平成３０年１月２２日（月）

第１学年
英語基礎「動名詞」

第１学年は鮎石先生の英語基礎「動名詞」で授業研究を行いました。

授業中の様子から
まずは例文を音読することから授業が始まりました。ペアでの読み合いではBGMが流れ最初は声が小さかったものの、回を繰り返すことに徐々に大きな声になりながら例文を読み合っている印象でした。授業者の「英語に親しみや、すくする雰囲を構成したい」という考えに基づいたBGMを使う工夫でした。最近、「新英語研究会」を中心とした英語の授業では、BGMを使ったり、洋楽を歌うことから授業をはじめる工夫があります。
ワークシートの取り組みでＡ君はすぐに終わり、他の生徒のケアに回っている様子がありました。観察した７・８班では男子に理解力があり、女子にやや苦手意識があることがわかりました。最後のconversationでは活動的な印象は持てないものの「女子同士、男子同士で集まってしまう」ことをどう克服するか、他の授業でも役立てる課題が見えました。

本時の流れ
① 例文を音読する。
② 例文をペアで読み合う。（ペア）
③ ワークシート（グループ）
④ 意味を話し合う。conversation

第２学年
化学基礎　「酸化還元反応」

第２学年は文理数学系列（理系）山口先生の化学基礎
「酸化還元反応」で授業研究を行いました。
授業は前時に行った塩化ナトリウム水溶液の電気分解についての考察を行いました。

授業中の様子から
１班　意見を出し合い、協力できていた。
いつも一緒のグループなので話し合いがスムーズ。
４人の中で学力の差はあるが、リーダー的なものはいない。
Ｓ君が率先して図を描いていることに驚いた。
Ｎ君が「そういうことか」と良い表情で納得していた。
２班　Ｈさんを中心に３人がコミュニケーションをとりながら取り組む。
グループが一つにまとまり、あきらめずに課題に取り組んでいた。
班に学力差があるが、女子を中心に話を進めていた。教師との関係がよく気軽に話し合える環境が作られていました。

本時の流れ
①塩化ナトリウム水溶液の電気分解を振り返る。（グループ）
・化学反応式・イオン反応式
・グループごとにグラフをまとめ、共有
②発表
③まとめ

（４）先進校視察

第１回視察　　平成２９年　６月２日（金）　埼玉県立新座高等学校

＜埼玉県立新座高等学校　協働学習への取り組みについて＞

①授業における生徒の様子や教師の関わりについて

・日本史資料集(各出版社資料集や日本史事典)を設置してある。
英語は「教科書、ノート、辞書何を見てもいいぞ」「ワードリストは○○ページからだぞ」などさりげなくヒントを伝えるようにする。
・リーダーを育てるグループ構成。仲間との信頼関係を作るように。
・私的な関係(普段の仲良し)だけでなく、パブリック(授業のグループの仲間)の関係を大切にするよう日頃から接する。
・教員は「○○しなさい」という上からの指示はしない。「今何をする時間かな。」など質問の形で投げかけて、気付かせる。
・教員は、グループを引っ張る役割の生徒の目線の高さに合わせる(しゃがむ)。
・教員の立つ位置は、テーブルの対角線上。その生徒から一番遠い場所。

②学校として組織的に取り組んでいることについて

・座席は市松模様に男女を配置
・特別教室前後の壁に「日本史で学ぶこと」など「学びの作法」が掲示してある。
・各学期に２回ずつ、各学年で１つずつ公開授業・研究会を実施。研究会は授業見学者が校内外問わず全員参加する形をとっている。

第２回視察　　平成２９年　６月１５日（木）大阪府立勝山高等学校
１６日（金）東大阪市立金岡中学校

＜大阪府立勝山高等学校　協働学習への取り組みについて＞

①　授業における生徒の様子や教師の関わりについて

・募集定員は２４０に対し、１学級３５人程度で７クラス展開を自助努力で行っている。平成２８年から座学では全クラスで『コの字型の机配置』を展開していている。生徒のことを尊重しながら教材に向かわせるために声掛けを行う場面が多くみられた。

②　学校として組織的に取り組んでいることについて

・荷物はロッカー等を使い、机の周りには極力置かないように配慮している。
・年に３回程度授業研究会を行っている。

＜東大阪市立金岡中学校　協働学習への取り組みについて＞

①　授業における生徒の様子や教師の関わりについて

・２００２年頃より協働的な学びをテーマとしての授業改善が始まる。コの字型の机配置を取り入れ、グループ（文殊と呼ぶ）を適宜行い、教室にいる全員の生徒を学び合わせることを目標に取り組んでいる。支援が必要な生徒に率先して寄り添う姿が見られた。先生に答えを求める生徒に対して答えを言わず、仲間に聞かせる、資料へと戻させる等、思考させる計らいが見られた。

②学校として組織的に取り組んでいることについて

・年度当初に新着任の先生向けの資料がある。
・文殊中には「訊かれるまでは教えない。」等いくつかのルールがある。
・年に３回程度全体的な授業研究会を行っている。各教師がビデオ研修会を年に１回行っている。

第３回視察　　平成２９年　１１月６日（月）筑波大学附属高等学校

＜筑波大学附属高等学校　協働学習への取り組みについて＞

①授業における生徒の様子や教師の関わりについて

・できるだけ干渉しないよう、生徒に考えさせ行動させている
・一人で解決しない、というような相手を意識させる声かけを行っていた
・分からないところは友人に聞いたり、辞書をひいたり、生徒が自主的に動く。
・教師の言葉掛けが、テンポ良く、生徒もそれに積極的に反応していた。（英語）

②「授業づくりについて」の工夫

・生徒の実態に合わせて生徒がどこで詰まるのかを見通して教材が作られていた。

・事前にアンケートをとり、生徒の今の実態やその単元について考えていることを把握し、次の授業に活かして行く。

・入試問題演習をするのではなく、論証力や発想力、数学を学ぶエッセンス、理学部数学科で必要とされる力を高校の授業内容でつけていた。（数学）

第４回視察　　平成２９年　１１月７日（火）東京大学教育学部附属中等教育学校

＜東京大学教育学部附属中等教育学校　協働学習への取り組みについて＞

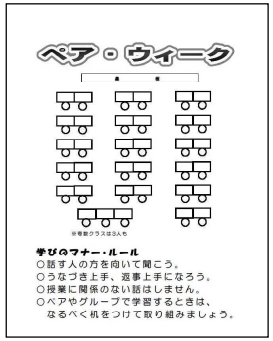
①授業における生徒の様子や教師の関わりについて

・教師が「話し合って」と言わなくても、自然と近くの仲間に聞く様子が随所に見られた。

・普通教室の机はコの字型の配置を取り、机はペアとなっていた。１人になっている生徒は逆に２人のペアに話しかけてペアになりたがる傾向。

②「授業づくりについて」の工夫

・生徒たちが力を合わせてできる課題設定にする（教科書や図解などといったものを使って一人で解けない課題でも近くの人と話し合いながら解けるような課題を設定する。）




（５）ペア・ウィーク

先進校視察を経て、「ペア・ウィーク」を設け、ペア学習やグループでの学習活動を導入しやすい環境づくりを図った。具体的には、校内で一斉に推進週間を設置して実施し、期間中原則的に朝のＳＨＲから帰りのＳＨＲまでの全ての授業において基本となる机配置をペアで授業等を行った。右図を各教室に掲示し、意識づくりに役立てた。

第１期　平成２９年１２／１１～１７

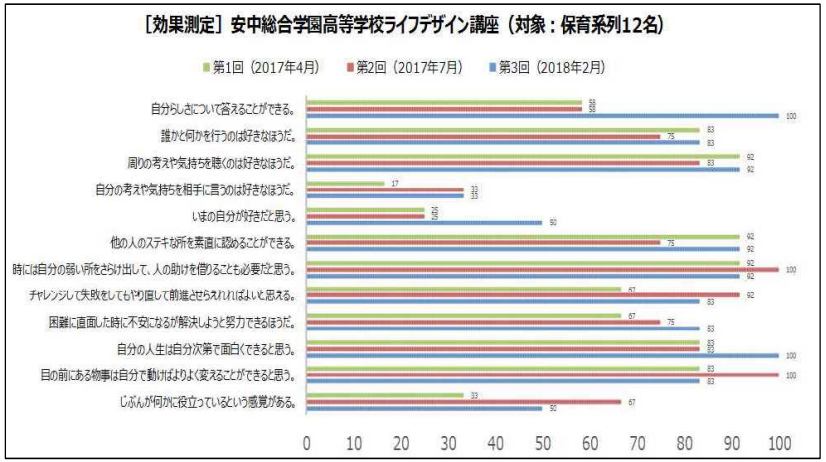
第２期　平成３０年１／１０～１６

## ○　実践研究の成果とその分析

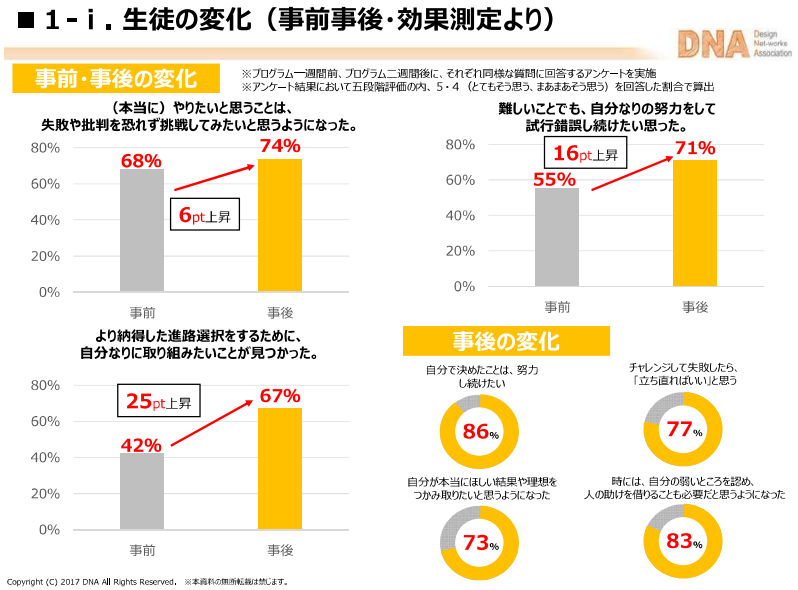
（１）ライフデザイン講座

平成２９年度の成果は、ほぼ全員の生徒が「前向きになれた」・「自分に自信が持てた」という感想を挙げた。個人的に自分が設定した１つのテーマを探求することは、自分の心を見つめることであり、責任感を喚起し、主体的に取り組まないと前に進まない状況を生んだ。1年間の授業を通して、考えを深める姿勢を養えたのではないかと考えている。来年度への課題は、生徒一人ひとりではなくある程度共通した研究テーマであっても、当事者意識を持ち、探求を深めていけるような課題の設定、取り組み方の提案を行う必要性がある。他教科や総合的な学習の時間等でも活用できる探求の提案の仕方を確立できるよう実践を積み重ねていく予定である。

平成 29 年度ライフデザイン講座のまとめ




（２）未来の教室の成果




「未来の教室」では、事前アンケートと事後のアンケートにより、生徒の主体性や挑戦意欲が顕著に向上したことがわかる。また、概ね７０％の生徒が今後の困難に立ち向かおうとするチャレンジ精神を持てたり、進路に前向きな姿勢を持てたりしている事が分かった。

（３）全ての教科の授業でアクティブ・ラーニングの視点を充実させる

◎授業アンケートの結果より

生徒からの授業アンケートの結果は以下の通りであった。

| | Ｈ２９ | | | Ｈ２８ | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 項目 | １年 | ２年 | ３年 | １年 | ２年 | ３年 |
| ①わかりやすい教材を使ったり、興味深い話をしたりするなど、授業を工夫している。（座学） | ７２ | **７５** | **６８** | ７４ | ６９ | ６１ |
| ②一斉授業だけではなく、ペア学習やグループ学習で話し合ったりする活動を行っている。（座学） | ６９ | **６１** | ５０ | ６９ | ５０ | ５０ |
| ③わかりやすい教材を使ったり、興味深い話をしたりするなど、授業を工夫している。（実習・実技） | | ７６ | **９０** | | ７８ | ６６ |
| ④実習内容を一方的に説明し実施するだけでなく、生徒同士が実習内容について創意工夫する話し合いを行っている。　（実習・実技） | | **８０** | **８３** | | ６９ | ６４ |
| ⑤授業で学んだ内容を自分でもっと勉強したいと思うようになった。（実習・実技） | | **７２** | **７３** | | ５８ | ６４ |

・①、③の結果より、わかりやすい教材や生徒の興味関心を引き立てる話題の提供等、授業の内容が改善されている。

・②の結果より１年生からの方がグループ学習やペア学習の実践に取り組みやすい事が言える。また、２年間の取り組みを経て２、３年生でもペア学習やグループ学習に取り組みやすい環境が整いつつある。

・③、④の結果より実習や実技では、生徒同士の関わり合いを意識した取り組みが進んでいる。

・⑤の結果より実習や実技を通して主体性がより育まれている。

◎その他

・成績不振科目の総数が平成２８年度よりも８％減少し、平成２７年度と比較すると１７％減少している。学習意欲の向上と基礎学力を底上げすることができた。

## ○　実践研究成果の活用方策

「ライフデザイン講座」を通して将来の家庭のあり方について積極的な姿勢や意欲を養うことができ、本校の課題とする「家庭を持つこと」や「子どもを育てること」等、一般的な家庭生活に関する事に関心が持ちにくい状況が改善されている。ゲストとの関わりにより、今後も地域との強いつながりをつくっていくことが期待される。

AI の普及に示される急速な社会の進展への対応、次期学習指導要領に示される学校や生徒の姿、大学入試改革の対応を考える中で本校では、来年度以降も継続して学年別の研究授業と授業研究会を含めた「授業実践研究会」を行う予定である。特に、研究を進める中で「主体的・対話的で深い学び」を育むためには日常の授業で提示していく課題の設定や工夫が重要であると考えている。「授業実践研究会」を通して課題や教材の共有を図るとともに生徒の姿を見取る授業研究を通して生徒理解を深め、主体的に学ぶ生徒を育みたい。

平成２８年度は４回の公開授業に延べ人数１４３名、平成２９年度は３回の公開授業に延べ人数１５４名の県内外の先生が参加しており、本校の授業改善の取り組みに県内の学校が関心を寄せている。また、平成２９年度には本校と同様に「生徒の姿を見取る事を中心とした授業実践研究会」を行う高校も現れており、本校の研究が成果となって他校へ波及している。次年度以降も本研究の成果を踏まえて他校と連携を図り、生徒が自己肯定感を高めて、良き社会人として生きていけるよう本研究の視点に沿って授業改善に取り組んでいきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

## 平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

| 番号 | １０ | 都道府県名 | 群馬県 |
|---|---|---|---|

| 拠点校名 | 群馬県立吉井高等学校 |
|---|---|

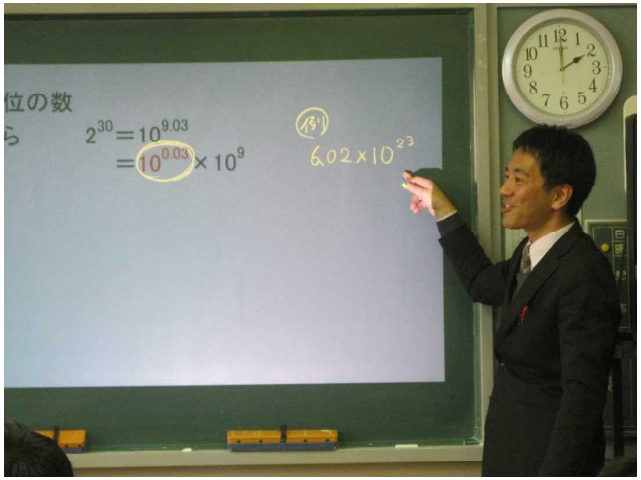
### ○　実践研究の具体的内容

１　アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善

(1)　ＩＣＴの活用

本研究ではＩＣＴの活用をテーマとし、２年間でホームルーム８教室、その他６教室にプロジェクターを設置し、授業内でＩＣＴ機器を活用する環境を整備した。その結果、多くの授業で資料説明や解説についてプロジェクターを用いて行うようになった。

また、各プロジェクターには書画カメラを設置し、生徒が解答したプリントなどをプロジェクターに投影するような発表活動が多く行えるようにした。




また、タブレットを２０台準備し、グループごとにまとめ、解答や意見を共有したり、プロジェクターに外部出力装置Miracast を通して投影する発表活動を行ったりした。使用したソフトは、初年度はClassi Note、２年目はロイロノートを使用した。どちらのソフトもタブレット端末の情報を瞬時に共有できるとともに、解答や解説といった補助資料を教師用端末から送信できる機能があり、グループ学習を進める上で有効であった。

また、実技科目ではタブレットのカメラ機能を活用し、Miracast を通じてプロジェクターに投影することで実際の動きを生徒に示したり、よくできた生徒の実演を共有したりした。

(2)　アクティブ・ラーニング型授業

本研究では、この２年間全ての教科でアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行ってきた。教科の特性により授業のスタイルは様々であったが、プロジェクターを

使用して講義の部分を簡潔に行うことで、生徒が自分の考えたことを話し合う場面や発表する場面を取り入れた授業とするなど、授業改善を努めた。

このような授業スタイルに移行していくと、いくつかの共通した問題点が出てきた。以下に問題点の解決に向けた改善策を示す。

① 授業展開について

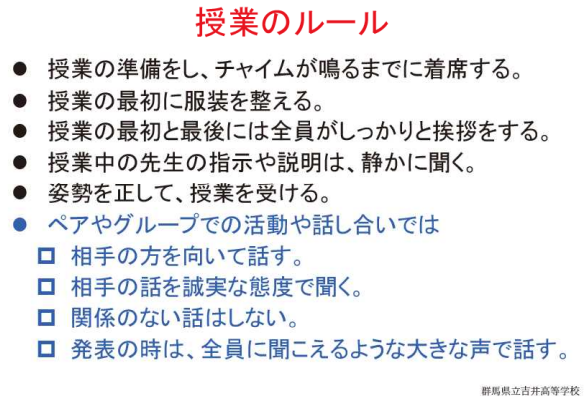
講義だけでなく、生徒による話し合いや発表を取り入れた授業では、それぞれの活動にメリハリをつけ、計画通りに授業を進めて行く必要があるが、話し合いや発表活動では予定していた時間をオーバーしてしまうケースが多く見られた。そのため、それぞれの活動時にはタイマーをプロジェクターなどで投影した結果、教師が時間を管理することで生徒が活動に集中し、授業が計画通りに行われるようになった。

② 話し合い活動について

話し合い活動では、グループで中心となる生徒が一方的に話したり、活動に参加しない生徒がいたりする場面が見られた。このような活動では課題の設定に問題がある場合もあったが、それぞれの生徒が活動に必ず参加するような仕組みが整っていないために起こった。そのため、昨年度講演会の講師であった京都大学の溝上慎一先生の著書や講演内容を参考に、個→協働→個のサイクルを重視した授業展開を取り入れるようにした。例えばある課題について話し合う場合は、課題について最初は個人で考え、その考えをグループで共有し、それぞれの違いや気づきを最後に振り返るという形で個人に戻すという学習サイクルである。このようにして、話し合い活動の問題点を克服した。

③ 発表活動について

多くの授業で発表活動を取り入れたが、授業によっては、生徒が原稿を棒読みし、声が小さく他の生徒に伝わっていないという問題点があった。そこで発表時やグループやペアワークでの話し合い活動の態度目標を明確にし、それを共有するために授業のルールを作成し、全ての教室に掲示した。




2 先進校視察

(1) 神奈川県桐蔭学園

昨年度の続き、１０月２８日に神奈川県の桐蔭学園のアクティブラーニング公開研究会に参加した。公開授業では、化学、数学、英語の授業を参観した。教科によって特徴の違いはあったが、授業の最初に目標を提示していること、個→協働→個の学習サイクルが意識されていること、グループワークや発表活動では相手の目を見てしっかりと伝わるように話すといった態度目標が達成できている点が共通して見られた。これが、全ての教科でアクティブ・ラーニング型の授業を進めていく上での基礎となっていると感じた。また、今年度は深い学びに向けた授業を意識しているということで、少し難しい感じるような課題設定がされていた。

公開授業に引き続き行われた講演会では法政大学の児美川先生からアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が目指すものはキャリア教育が目指すものと一致するという話があり、本校での取り組みの指針となった。

(2) 京都府東山中学・高等学校

１月２６日に京都の東山中学・高等学校のアクティブ・ラーニング実践研究会に参加してきた。公開授業では英語の授業を参観し、その後、学校と実践事例の報告と研究を指導している京都大学の山田先生の講演、溝上先生の講演を聞いた。

授業では、深い学びを意識して、生徒自身の英語の問いを作らせる学習活動が行われており、生徒もグループで話し合いながらよく考え学びが深まっている様子が伺えた。

また、授業改善に向けた取り組みでは、勉強会という授業改善のための研修があり、違う教科から３名が集まり、テーマに沿って授業改善のための研修を定期的に行っているという事例を聞いた。それぞれのグループの代表者が研究授業を行うことで研究の成果を共有し、授業改善につなげるという取り組みであり、来年度から本校でも取り入れたいと感じた。

山田先生の講演では、アクティブ・ラーニングをどこまでの目標を持って導入するかが重要だという話があった。具体的には、入試改革への対応だけを考えるのではなく、生徒が卒

業後の学校や社会に適応するための資質・能力育成を目標としないと組織としての取り組みがうまくいかないのではないかという話であった。これは、本校が今年度取り組んでいるカリキュラム・マネジメントの視点からの授業改善にも共通していると感じた。

(3) アクティブ・ラーニングに関連するフォーラム

アクティブ・ラーニングをテーマにしたフォーラムにも参加した。

８月に産業能率大学で行われた「キャリア教育推進フォーラム」では、化学、数学の模擬授業を体験し、その後熊本大学の苫野一徳先生による講演会を聞いた。講演会では教育哲学の観点から、教育の目的について話がありとても興味深く、今の教育に求められているものの意味をもう一度考えるきっかけとなった。

同じく８月に京都大学で行われた大学生研究フォーラムでは、アクティブ・ラーニングによって育成される資質・能力は、大学生が社会に出て活躍するために必要であり、その能力は大学からでは身につかないので、高校からアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が必要であるというデータが示された。

１２月の「学びのイノベーションフォーラム」では、茨城県立並木中等教育学校の中島校長先生の講演があり、授業でアクティブ・ラーニングをどの程度導入しているかを示す「AL指数」や振り返りを２文、８０字で書くことで論理力を身につけさせる「Ｒ８０」などの取り組み事例を聞き、大変参考になった。

## 3　授業公開・研究会

アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行う上で、お互いの授業参観や授業についての話し合いが重要であると考え、年間２回の授業公開と外部講師を招いての授業研究会を行った。授業公開週間は６月と９月に３週間ずつ行った。この期間に参観してほしい授業を「見に来て授業」と位置付け、授業者から事前に提出してもらった。一覧を見て、見たい授業を一人２回以上参観し、その際には「授業見学シート」を記入するようにした。これは、このシートに書かれた授業についての質問が教員間の授業についての対話につながることを目的として行った。授業研究でも授業についてのコメントではなく、授業を見て感じたことを質問する形式で行い。研究授業や公開授業を行う先生との対話を重視した形式のものとした。

１１月２２日には、県内の先生にも参観してもらう公開研究授業を行い、国語、公民、英語、物理、数学の授業を行った。ここでも参観に来られた先生方に「授業見学シート」を配布し、授業研究では授業への質問についてグループごとに話し合ってもらい、質問に答える形で授業の振り返りを行った。参加者のアンケートには、「授業者を傷つけない授業研究の取り組みが大変参考になりました。」「あらためて自らの授業を改善しようと思いました。」と言った声もあり、参加者の９２％が公開授業について参考になったと回答した。

**9月　公開授業期間　見に来て授業一覧**　　の授業は研究授業　　公開授業期間中に最低2回は授業

| 日 | 9月4日 | | | | 9月5日 | | 9月7日 | | | | 9月8日 | | | 9月11日 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 曜日 | 月 | | | | 火 | | 木 | | | | 金 | | | 月 | | |
| 1 | | | | | 体育2③女 | 書道Ⅰ③ | 現代文B5ナ～ | | | | 数学Ⅱ | 書道Ⅱ② | 国語総合4組 | 現代社会1-4 | 書道Ⅱ② | |
| 担当(場所) | | | | | 村上(書物倉庫) | 横原(書道室) | 武井(3-3) | | | | 清水(2-4) | 横原(書道室) | 大山(1-4) | 下風(1-4) | 横原(書道室) | |
| 2 | | | | | | | 化学 | 体育12男 | コミュ英Ⅰ | コミュ英語Ⅰ | 音楽Ⅰ | | | 現代文B① | 英語表現Ⅰ① | 生物 |
| 担当(場所) | | | | | | | 竹上(2-3) | 村上(書物倉庫) | 茂木(1-4) | 小林容(1-3) | 須田敦(美美室) | | | 須田克(2-4) | 水谷(2-2) | 狩野(3-4) |
| 3 | CD | | | | | | 国語総合4組 | | | | 課題研究(金野) | | | 保育指導法 | 英語表現Ⅰ① | 国語総合3組 |
| 担当(場所) | 根岸(情報室) | | | | | | 大山(1-4) | | | | 古谷(簿記) | | | 須田敦(美美室) | 茂木(学1) | 大山(1-3) |
| 4 | | | | | | | 世界史A | 現代社会1-2 | 国語総合3組 | | 課題研究(金野) | | | 音楽Ⅰ | | |
| 担当(場所) | | | | | | | 人宮(2-3) | 下風(1-2) | 人山(1-3) | | 占谷(簿記) | | | 戸松(演奏室) | | |
| 5 | | | | ココミュ英語Ⅱ① | 数学Ⅱ | | 生物基礎3組 | 数学B | | | 化学 | | | 物理基礎 | 応用数学2 | デザイン② |
| 担当(場所) | | | | | 小宮(2-3) | 清水(2-4) | 狩野(学2) | 飯田(2-4) | | | 竹ト(2-3) | | | 反町(物理) | 小林良(学5) | 浦迫(美術室) |
| 6 | 生物基礎3年 | | | | | | フードD2年 | 数学Ⅱ | 日本史B5ナ～ | | 古典A | | | コミュ英語Ⅰ | ツルフェークュⅡ | 発達と保育② |
| 担当(場所) | 反町(3-4) | | | | | | 徳久井(調理) | 高野(学4) | 大野(学1) | | 武井(3-3) | | | 原田(学9) | 戸松(演奏室) | 高橋幸(学3) |

平成２９年度群馬県立吉井高等学校

### 授業見学シート

氏名【　　】

| 日付 | 月　日　限 |
|---|---|
| 授業名（担当者） | |

メモ

生徒の様子に着目し、授業中に気づいたことをメモして下さい。

参考になったこと・アドバイス

授業の中で良いと思った点、自分の授業で再現したい点を書いて下さい。また、授業者へのアドバイスがありましたらお願いします。

質問したいこと

授業者に質問したいことを書いて下さい。

また、今年度は産業能率大学の小林昭文先生に３回来校いただき、授業研究会や講演会を行った。５月１９日には、小林先生に物理の授業を行っていただき、全教員が生徒役となり授業を体験した。今年度本校に着任し、アクティブ・ラーニング型の授業を知らなかった教員にとっては特に新鮮な体験となった。

９月２２日には、化学基礎の授業を参観してもらい、授業についての振り返り会と講演会を行った。振り返り会では、質問事項の違いによって授業を振り返る視点が異なるということを体験することができ、その後の本校の授業研究、振り返り会のやり方の指針となった。講演会では、アクティブ・ラーニングについての話だけではなく、公開授業における授業の見方について教授してもらった。特に、お互いの授業を参観するときのポイントは、生徒の動きに注目すること、うまくいっている場面にはどのような仕掛けがあるのかを見ることなどが強調され、その後の公開授業で取り入れられる内容であった。

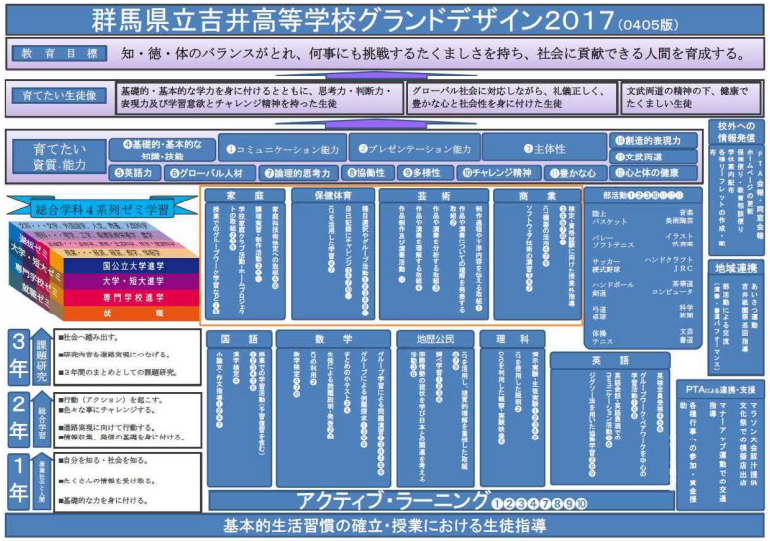
１１月２２日の公開研究授業も参観いただき、講演会も行ってもらった。講演会は県内から多くの教員が参加した。アンケートには、「主体的な学びということで、実際にどうしたらよいかわかっていなかったので大変参考になりました。」「質問で介入することや、リフレクションシートの具体的な方法が知れてよかったです。」など多くの参加者にとって有意義な講演会となった。

また、１月には全職員がここまでに取り組んできたアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の代表例をまとめた「アクティブ・ラーニング実践レポート集」を作成した。

４　育成する資質・能力の共有

本校では、アクティブ・ラーニングの視点での授業改善を行う中で、どのような目的でこの授業改善を行っているのかを学校全体として共有することにも重点を置いた。具体的にはカリキュラム・マネジメントの視点からグランドデザインを作成し、本校が授業を中心とした様々な教育活動でどのような資質・能力を育成するかを共有する取り組みを行った。昨年度作成したグランドデザイン２０１７では特に「主体性」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」を中心的な資質・能力として設定し、その育成のための授業改善を進めた。その中で、実際の教育活動が目標としている資質・能力の育成につながっているのかを検証するために企画会議という会議を立ち上げ、毎週月曜日に分掌、学年、教科の視点から確認を行った。また、１０月と１月には全職員が参加する形で現在行っている学校教育活動の課題や改善策、今後育成する必要がある資質・能力についてワークショップ形式で話し合いを行った。この場で話し合った内容をもとに、企画会議において改善策について検討した。具体的には、生徒のプレゼンテーション能力を育成するために１学期終業式に部活動の代表者による部活動成果発表会を実施することや、主体性の育成のために学校行事に生徒が主体的に関わるような仕組みづくりをすることとした。

このように、学校が育成する資質・能力を全教員が共有することで授業での目標も共有することができ、そのための授業改善にもつながると考えた。




## ○　実践研究の成果とその分析

この２年間の実践研究によっていくつかの成果が得られた。ＩＣＴに関しては、多くの教員がＩＣＴを活用した授業を行うようになり、その中で生み出された時間を生徒が考えたり、話し合ったり、発表する時間に充てることができるようになった。また、話し合いの場面では「まなボード」というホワイトボードを使用することで、生徒が意見を共有しやすくなり、発表活動も行いやすくなった。

「まなボードを使ったグループ学習」

「まなボード」は教科の授業だけではなく、キャリア学習を中心に行っている１年生の「産業社会と人間」の授業や「ＬＨＲ」でも活用され、様々な場面で生徒に話し合う環境が提供されるようになった。その結果、１２月に行ったアンケートでは以下のような結果が見られた。

学年によって違いはあるが、アクティブ・ラーニング型の授業によって活用力や表現力が身についていると回答した生徒は、３年では９割以上、１・２年では８割以上いた。また、コミュニケーション能力や発表する能力（プレゼンテーション能力）についても、ほとんどの生徒が身に付いていると回答している。これは、グランドデザインにより、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を授業などで育成するという目標が共有されている一つの成果であると考えられる。

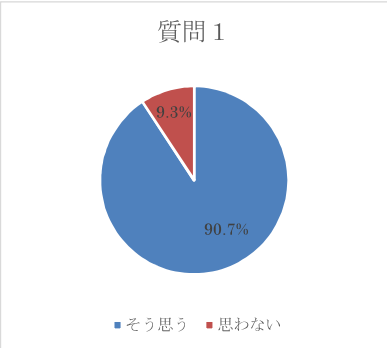
| No. | 質　問　事　項 | ３年 | | ２年 | | １年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | そう思う | 思わない | そう思う | 思わない | そう思う | 思わない |
| 1 | 授業で基礎的な知識技能を習得することができている。 | 94% | 6% | 84% | 16% | 91% | 9% |
| 2 | 授業を通じて活用力や表現力を向上させることができた。 | 94% | 6% | 82% | 18% | 89% | 11% |
| 3 | コミュニケーション能力が向上した。 | 87% | 13% | 76% | 24% | 84% | 16% |
| 4 | 発表する能力が向上した。 | 82% | 18% | 53% | 47% | 78% | 22% |

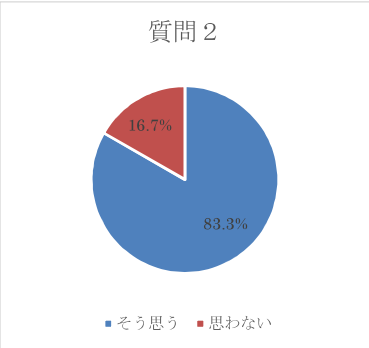
また、授業についてのアンケートではアクティブ・ラーニング型の授業がどの程度実施されていたかについて質問した。

調査対象：国語・数学・英語・理科・社会の授業授業者（１～３年）

質問１　授業の始めに、ねらいや目標が示されていた。

質問２　ペアやグループでの学習活動があった。

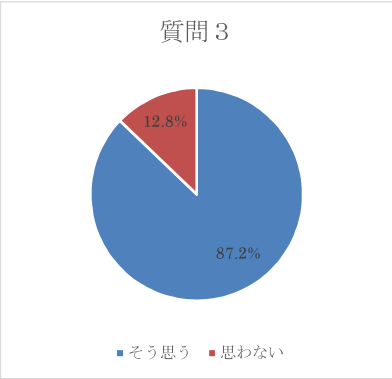


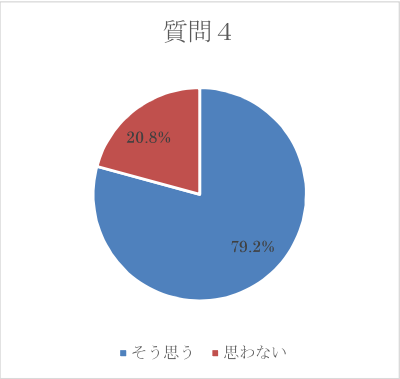




質問１では５教科のほとんどの授業で授業の最初にねらいや目標が示されていることがわかる。また、質問２では８割以上の授業でペアやグループによる話し合いなどの学習活動が行われていることもわかる。このようにそれぞれの授業では最初に目標を共有し、授業の展開で生徒が他者と対話的に学習する場面があったことがわかる。このような授業での取り組みも生徒の活用力、表現力の向上に結びついていることが伺える。

質問３　自分の意見や考えを述べたり発表したりする機会があった。

質問４　授業の始めまたは終わりに振り返り（まとめ）の時間があった。

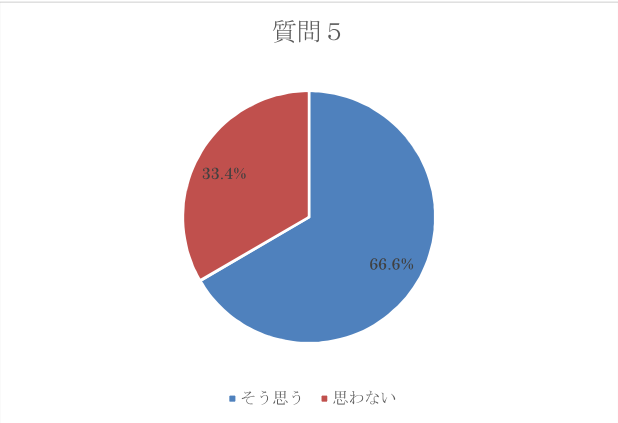



質問３では授業で発表する機会があったかを質問し、９割近い授業でそのような機会があったことがわかる。また、質問４では、８割近い授業で最後に振り返りが行われていたことがわかる。

質問１～４の結果から、５教科のほとんどの授業でアクティブ・ラーニング型の授業が実践され、それが生徒のアンケート結果２「授業を通じて活用力や表現力を向上させることができた。」につながっていることが伺える。

質問５　私は、授業で学んだ内容に興味をもち、さらに深く学ぶために、家庭学習を行った。




質問５では、授業での学びが深い学びとなり学びに向かう態度の育成につながっているかを質問した。結果としては６割以上の生徒に学びに向かう態度が見られたが、まだ課題も残っている。

## ○　実践研究成果の活用方策

実践研究の成果は、今後の授業改善に向けた指針となると考えられる。まず、アクティブ・ラーニング型の授業を組織的に行うときには、以下のような共通認識が必要となる。

(1) 授業のルールの明確化（特にグループワークや発表活動）

(2) 個→協働→個の組立て

(3) 学習活動の時間管理

(4) 授業の目標、活動の目標を明示し、生徒と共有する

(5) 学習の振り返り

また、授業改善に向けては組織的な取り組みが必要となる。公開授業期間中にも全ての教員が授業を参観し合うような仕組みを作ることや、授業者を傷つけずに授業について対話するような環境作り、そして研修の時間などを使って授業改善に向けて研修する仕組み作りが必要となる。このような仕組みを作り、運営する校内の組織を作ることも必要である。

このような本校での取り組みは、事例として県内の高校にも提供され、使用した教材や指導案、授業見学シートなども公開研究授業を通じて配布している。また、全教員が今年度行ったアクティブ・ラーニング型の授業案をまとめた「アクティブ・ラーニング実践レポート集」を１月に作成し、今後、県内全校に配布する予定である。